

ゴールドシュミット会議 2016 開催結果報告

1 開催概要

- (1) 会議名 : (和文) ゴールドシュミット会議 2016
(英文) Goldschmidt Conference 2016
- (2) 報告者 : ゴールドシュミット会議組織委員会委員長 益田 晴恵
- (3) 主催 : 日本地球化学会、日本学術会議、Geochemical Society (地球化学会)、European Association of Geochemistry (ヨーロッパ地球化学連合)
- (4) 開催期間 : 2016年6月26日(日)～7月1日(金)
- (5) 開催場所 : 横浜国際会議場(神奈川県横浜市)
- (6) 参加状況 : 71カ国・地域 4,275人(国外2,783人、国内1,492人)

2 会議結果概要

- (1) 会議の背景(歴史)、日本開催の経緯 :
ゴールドシュミット会議は「地球化学の父」と言われる Victor M. Goldschmidt (1888–1947) の名を冠する学術会議である。Geochemical Society (以下 GS) と European Association of Geochemistry (以下 EAG) が隔年で責任団体となり、共同で主催して 1991 年から毎年開催されてきた。2016 年の会議は 26 回目であった。国内には、地球化学分野の研究者は多くおり、地球科学の分野全体から見ても、国際的に注目されている研究者や研究内容は多いと自負している。日本地球化学会は第 3 局としてこの会議に関わってきたが、日本での開催は 2012 年に Geochemical Society からの要請を受けて確定した。国内での開催は 1993 年の倉敷以来、13 年ぶり、2 度目であった。
- (2) 会議開催の意義・成果 :
地球化学は、太陽系と地球を包括して、それらの形成初期から現在に至るまでに起こった現象の解明や未来予測まで広範囲に含む学問分野である。ゴールドシュミット会議は、地球化学の分野では世界で最大の国際学術会議である。また、先端の研究者が一堂に会する一年に一度の機会であり、研究発表のレベルが高いことでも知られている。日本地球化学会には国際共同研究を行っている会員が多く、この会議を国内で開催することは、国際社会における責任である。
- (3) 当会議における主な議題(テーマ) :
「Unique, Ubiquitous, Universe」(和訳は「森羅万象を化学する」)をメインテーマに、18 のテーマセッションのもとで 200 を越えるセッションで、惑星地球と隕石、岩石・鉱物化学、水圏・大気圏化学、太陽系・地球の形成初期から現在に至るまでと人間活動や自然現象に伴う環境変遷など、地球化学分野全般の幅広い内容を議論した。
- (4) 当会議の主な成果(結果)、日本が果たした役割 :
この会議は、歴史的に欧米からの出席者が多いが、アジアでの開催ということで、東アジア・オセアニア諸国からの参加者が多くあり、結果として、この会議の歴史上第 2 位の参加者数を記録した。本会議以前には比較的小なかった大気・海洋やそれらから派生する

環境変動などの現在の地球環境とその将来予測に関わる分野の研究者が多く集まり、プレワークショップやセッションなどで存在感を与えていた。また、日本学術会議を始めとして複数の国内団体から支援を得て、本会議の歴史で最大の数の学生や若手研究者への参加支援（旅費・登録費支援などを合わせて約 140 名）を行った。また、学生・若手研究者向けのワークショップを主催した。これらのことは、これまでゴールドシュミット会議へ参加しなかった分野の研究者への参加を促し、将来この分野を支える若手・後継者の育成するための、我が国からの大きな貢献であったと考えている。

(5) 次回会議への動き：

この会議は毎年開催されており、テーマも毎年話し合われている。2017 年はパリで開催予定であり、プレナリーセッションの他に 23 のテーマセッションが計画されている。それ以降はボストン（2018）とバルセロナ（2019）が開催地として決定されている。2020 年はホノルルとポートランドが立候補している。

日本でも 10 年程度経過後に会議を招致したいと考えており、そのための活動を継続する予定である。

(6) 当会議開催中の模様：

別紙（1）。

(7) その他特筆すべき事項：

開催を希望していた中国が立候補を取りやめたことから、今回の開催は GS からの要請を受けたものであった。そのため、招致競争などはなかった。日本地球化学会は数年先の立候補を考えていたため、予想よりも早期に主催することとなり、最初のうちは準備に手間取った。特に、短期間（3 ヶ月程度）で開催地と会場を決定する作業はかなり重労働であった。この年の会議の責任団体である GS と LOC（国内組織委員会）の意向を調整しながら運営を行うのは骨の折れることではあった。日本らしさを演出する運営を心がけたのは、結果としてたいへん好評であった。

また、この会議の共催を契機として、協力関係を円滑にすることと将来にわたって学術交流を継続するために、GS、EAG と MOU を締結した。これにより、対等な立場で、将来にわたる協力関係を継続する道筋を作ったことは、会議開催の成果の一つである。

3 市民公開講座結果概要

(1) 開催日時： 2016 年 7 月 2 日

(2) 開催場所： 横浜市開港記念館

(3) 主なテーマ、サブテーマ： 「青少年のための地球化学フォーラム」—地球の謎を知り化学を学ぶ楽しさを身につけよう—

(4) 参加者数、参加者の構成： 一般参加者 87 名 講演者・コーディネーターなど 10 名

(5) 開催の意義：

科学研究に対する一般社会の理解を深め、後継者育成に関わることは、日本学術会議の重要な役割である。この公開講座では、地球化学研究の最先端を初等・中等課程の学生や一般市民に紹介し、科学研究や学ぶことの楽しさを共有する。この会を通じて、ゴールドシュミット会議で議論される地球化学研究の意義を社会に広く周知し、子どもたちに地球科学・地球化学に興味を持ってもらうこと、一般市民に研究への理解を広げることが開催の意義である。

(6) 社会に対する還元効果とその成果：

横浜市教育委員会を通じて横浜市内の小・中・高等学校で開催の宣伝を行った（別紙 2）。

また、前半は講演、座談会、後半は交流会で構成した。講演者3名は、小学生であっても興味を持てるように工夫して、先端研究の話をつかりやすく伝えていた。座談会は、この年の8月に三重県で行われた地学オリンピックの宣伝も兼ねて、地学オリンピックメダリスト2名が同席した。準備と運営は、横浜国立大学の津野宏博士と学生たちが担当した。また、交流会はサイエンスコーディネーターでもある横浜市立小学校の藤原教諭によって進行された。半数程度の聴衆が交流会にも出席し、研究内容だけでなく、研究者・地学オリンピックメダリストの子ども時代や日常生活などの話題でも盛り上がった。隕石や化石などもおみやげに準備した。

参加者には、講演者の著書の読者や地学オリンピックに出場したい高校生などもいた。子どもを勉強好きに育てるにはどうすればいいかなどの切実な話題もあったが、基礎科学研究の面白さやそれに夢中になる研究者という生き方を知ってもらうことにはある程度成功したと考える。また、参加した研究者にとっては、中等教育課程までに在籍する学生たちと触れ合うことの重要性を認識する機会ともなった。

(7) その他：

一般講演会は、ゴールドシュミット会議では初めての試みである。我が国では、様々な規模の学術会議で一般講演会を行うことが多いが、欧米ではこのような普及活動にさほど熱心ではないように感じられた。Geochemical Society 会長の Laurie Reisberg 博士が、この講演会に興味を持ち、予定にはなかった開会の挨拶を行い、講演の最初の部分を見学した。このような活動の意義を認め、今後のゴールドシュミット会議開催のおりには検討するとのことであった。

4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

日本学術会議との共同主催であることで、会議運営上、様々な有意義なことがあった。

第一に若手に対する支援である。学生や発展途上国の若手研究者に対する旅費や登録費補助などで、国際会議の経験の少ない参加者を増やすことができたのは、日本学術会議からの経済的支援があったからである。Geochemical Society は従来から NSF、NASA などの政府機関とエルゼビアのような民間からの支援を得て若手支援を行って来た。しかし、政府機関が支援できるのは米国在住者だけであり、米国以外に住む学生や発展途上国からの参加者への支援は極めて限定的であった。日本学術会議から会場費の一部を負担していただいたことで、同額の予算を 98 名の登録費・要旨投稿費支援に振り分けることが可能になった。結果として、ゴールドシュミット会議の歴史上最大の人数の在住国を問わない若手支援を行った。このことは、未来を担う研究者の育成に大いに役立つものである。

第二に、日本学術会議との共同開催が認知されたことにより、関連分野の学術団体や科学機器関連会社・出版社も含む民間団体などからもさまざまな支援が受けやすかったことである。これらの団体からは、展示ブースへの出展・学生向けワークショップ開催費用・ミキサーでの飲食費など、イベント開催費用の一部負担（寄付）を引き受けていただき、心強い思いであった。

第三に、日本学術会議が積極的に関わることで、我が国の学術、特に基礎科学分野に対する支援姿勢を世界に知らせる結果となったと考えられることである。

最後に、報告者は連携会員であるが、個人的には、学術会議とともに活動して来た仲間に多くの精神的かつ実効的活動を通して助けられたと感じている。助けてくれた仲間の多くは日本学術会議がなければ話し合うことがなかったかもしれない人たちであり、この点からも学術会議の活動に感謝している。

[別紙1 : 写真]

